

解説

海外進出に夢を託す

やすだ かすなり
安田 一成

ヤスタエンジニアリング(株)
専務取締役

1 はじめに

明けましておめでとうございます。年初の特集ということで、推進業界の将来について私個人の夢を語らせていただきたいと思います。

日本ではじめて推進工事が行われてから約70年が経ちました。下水道整備を中心に電力・ガス・通信など幅広い地下インフラ整備にこの技術が活躍し、日本の地下インフラはこの技術によって急速に整備され、それに伴い推進工法の技術も発展してきました。

2 ヤスタエンジニアリング(株)の軌跡

当社の創業は昭和50年（1975）です。創業者は私の父で現在の社長であります。当時は地盤改良を中心に行う個人経営の小さな建設会社でした。当時はゼネコンや地場コンの下請けや孫請けで施工を行っていましたが、現場を行っていくうちに推進工法と邂逅^{かいこう}して携わるようになり、そこで新たな展開として推進工事を行うようになりました。

普及率の向上を目的に下水道整備に多額の予算が付き、工事の発注量が増えるに伴い、推進業者の受注も売り上げも増えていきました。そこで当社も社員を増やし設備投資を拡大していきました。昭和50年代というと、推進延長50mで長距離といわれるなど、今と比べると

技術的にはまだまだ未熟でしたが、工事の発注量が多かったので、次々と工事を受注し、施工を行い、徐々に経験や技術を身につけていきました。

そしてバブル崩壊後、昭和から平成に時代が変わると、景気対策としてさらに公共投資が行われ、それに伴い工事量がピークを迎え、発注者から求められる施工条件も非常に厳しくなり、500mを超える長距離やR=30m以下の曲線施工まで求められるようになりました。それに伴い推進技術も飛躍的に発達していきました。

この時期は業界全体が盛り上がり、同業他社が独自の工法協会を設立して技術開発を競いあっていたと思います。極小用地や到達立坑省略などの発注者の要望や巨礫・岩盤など拡大する土質条件、コストダウン、排泥削減などの環境問題への対策等、付加価値をつけてシェア拡大を狙いシノギを削ったのです。当社も自社で工場を持ち、独自の技術開発を行ってきました。それに伴い業績も右肩上がりに伸びることができました。

ところが国内のインフラ整備が成熟期を迎え、下水道やその他の地下インフラの整備も普及が進み、平成10年（1998）をピークに推進工事の発注量が漸減^{ぜんげん}していきました。当社もこの時期をピークに売り上げが急激に減少していきました。

また、平成20年（2008）をピークに日本の人口も減少し、少子高齢化がどんどん進むようになりました。それにあわせるように民主党政権下で建設業氷河期が到

来し、工事発注量が激減し、施工単価も全盛期の半分に、倒産する会社が続出するなど業界は一変して苦しい状況に陥りました。

私が入社したのは平成14年（2002）で、会社としては徐々に厳しい状況になっている時でした。

そして当社も元請が倒産して不渡り手形による損害を被るなど、会社経営が非常に苦しい状況になっていきました。

そういう状況の中でも地道に技術開発を続け、営業活動も積極的に行き、コストダウンを図りながらなんとか会社を懸命に維持してきました。

ところが社会資本整備が整う日本の将来を考えると、この先推進工事が大きくV字復活する見込みは薄く、未来永劫受注を安定的に確保することは難しくなるのではないかと、まさに日本の推進業界に「夢がない」と考えるようになりました。

3 視野を広げ見えてきた夢

長年にわたりこの推進業界で事業を行い、技術者を育成し、設備投資を行い、技術開発を行ってきたにもかかわらず、この国で事業を継続することは厳しくなることが予想され、そして先代が築き上げた会社、社員、設備に技術等、このままでは潰れていくのではないかと危機感を持ち、二代目の経営者として必然的に海外進出の選択に至りました。

そこで海外に目を向けると今まで見えなかったことが見えてきました。それは日本の推進技術は世界でもトップレベルの技術であるということでした。

今までは競争の激しい国内のみで工事を行っていたので、日本の推進技術が世界でもトップクラスであると自覚することがありませんでした。社員も厳しい作業環境の中、世界を見ることなく目の前の推進工事を無事に完了させることだけに集中して現場で施工を黙々と行っていました。

ところが海外に目を向けると我々の技術は世界でもトップレベルであることがわかり、そこに夢を見るチャンスがあるのではないかと思います。

当社は平成17年（2005）より韓国、台湾を皮切りに、

ベトナムとインドネシアに海外展開をしており、今現在特に力を入れているのがベトナムです。現在ホーチミンでODAプロジェクトを受注し施工中であります。

4 夢の実現にむけて

推進工法は施工をする際、人間の技術・技能の占める割合が高く、いくら機械設備がしっかりと整っていても、それを操る技術者がいなければ施工ができません。最近でこそある程度の技術を持った日本以外の推進工事業者が存在し外国人技術者も存在しますが、日本企業と同レベルの技術を持った技術者はまだいません。しかし海外プロジェクトで日本人技術者を投入するとコストがかかり利益が出ないどころか受注競争にも勝てません。

そこで重要になってくるのが現地人の人材育成です。当社はベトナムの建設会社と合弁会社の設立に向けて交渉を進めています。そしてホーチミンの現場にそのパートナーからベトナム人スタッフを現地に送り込んでもらい、当社の日本人スタッフ、ベトナム人スタッフとパートナー企業のスタッフでミックス施工班を作り、日本人スタッフが技術指導を行いながら施工を行っています。

そしてついに平成30年（2018）9月にはじめて施工管理技術者、オペレータ、作業員などすべてがベトナム人の施工班を作成し、そのチームで施工のすべてを行い、11月に無事に到達することができました。念願である日本人以外での施工班を育成することができたのです。現在ではベトナム人だけで構成される施工班を3班編成し、推進を行えるようになりました（写真-1、2）。



写真-1 ベトナム人だけの施工班